

日本における中国新時期小説受容の濫觴

—『傷跡』選集と『天雲山伝奇』選集の翻訳目的と操作の視座から—

孫 若聖

(神戸大学国際文化学研究科博士後期課程)

In "The Translator's Invisibility", L. Venuti draws our attention to the relationship between translators and translations through his finding that translators in English-speaking countries, especially in America and Britain, play an invisible role in the process of translation and the translation itself. In fact, apart from domestication and foreignization, translators have other different ways to manipulate the translation. The present paper will analyze two translated texts in Japanese from the perspective of the purpose of the translator, in order to reveal that in translating, selection criteria for the source text and for the notes in the translated text will be used to achieve the translator's purpose. The two Japanese translations are the earliest collection of Chinese novels that were written after the Cultural Revolution (1966-1976).

1. はじめに

L. Venuti は *The Translator's Invisibility* において、英米文化での翻訳者の境遇と活動は不可視(invisibility)だと指摘することによって、訳者と翻訳の関係への再考を呼びかけた。実は、翻訳者は同質化、または異質化のストラテジーを使用してテキストをリライトするだけでなく、彼らは常に特定の翻訳目的にそってあらゆる方面で起点テキスト(以下 TT)に操作¹している。

1976年10月から、中国では文化大革命(以下「文革」と略称)の沈静化につれて、革命ロマン主義という一元的な文学創作の金科玉条も廃止されるようになった。それに代わるものとして、「新時期小説」が登場した。新時期小説は中国文学研究における専門用語で、中国文化大革命終結後の1979年以後創作されたり、出版されたりした中国大陸にいる作家の小説作品を指す。但し、1979年以前の一部の文革が普通の人々に与える傷害を暴露する小説も新時期小説のカテゴリーに入る。

このような、中国が変貌した後の文学作品が日本に初めて伝えられたのは、『傷跡』(以下『傷跡』選集と呼ぶ、「傷跡」の場合、「傷跡」という短編小説だけを指す)と『中国告発小説集 天雲山伝奇』(以下『天雲山伝奇』選集と略称、「天雲山伝奇」の場合、「天雲山伝奇」と

Sun, Ruo Sheng, "The Origin of the Translation of Chinese New-Period Literature in Japan", *Interpreting and Translation Studies*, No.13, 2013. pages 43-62. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

いう中編小説だけを指す)という二つの中国小説の選集の翻訳出版による。このうち、『傷跡』選集は傷跡小説の選集であり、中国で出版された短編小説の作品群から訳者が7篇を選んで構成しているものである。『天雲山伝奇』選集も同様に訳者が自らの判断で、三篇の中編小説を選んで構成しているものである。出版形式をみると、『傷跡』選集は出版社と工藤がコストを共同負担しているが、『天雲山伝奇』選集の場合は不明である。出版時期からみると、『傷跡』選集は1980年12月に出版された、最も早期の新時期小説の訳本と認められていたが、一年後の1981年10月20日に出版された『天雲山伝奇』選集でのすべての作品は1979年中に翻訳されたので、本研究では『傷跡』選集と同じ時期のものを見なす²(ただし、訳者による解説は1981年作成)。そのため、この二つの訳本は、日本における新時期小説受容の濫觴である。初期1985年以前)の新時期小説は、基本的にリアリティーの手法で書かれた物語小説で、テキストの情報伝達(informative)機能を重んじすぎ、美学的な価値が高くない単調な文学作品といわれる。

しかしながら、このような新時期小説からなる『傷跡』選集と『天雲山伝奇』選集は、翻訳目的、起点テキスト(以下ST)の選択基準、訳者注のあらゆる面で大きな相違が見られる。ST選択基準、訳者注のどちらも、訳者の主観的な意志を客観的に反映できる証拠であると同時に、翻訳目的を実現するための手段である。そのため、本論では、それぞれの訳本について、翻訳目的、ST選択基準、訳者注の使用という3点を中心に対照的に考察する。こうした考察を通じて、多彩ではない中国新時期小説が翻訳される際、訳者がどのように自らの翻訳目的にそって、訳本を操作するかを明らかにしようとする。

対照分析のテキストについて、日本語テキストは『傷跡』選集と『天雲山伝奇』選集にする。中国語テキストは1980-1981年にかけて出版された公式な小説選集に掲載されたものとする。なぜなら、その時代の中国の慣例として、受賞した、また有名になった文学作品は、もともとどこで発表されたかを問わず、改めて一律に公式な作品選集に収録されて再出版されたからである。本研究で参照したSTは、このような作品選集に載ったものである。ただし、『傷跡』選集での「阿恵」のSTのみ欠如している。

2. 『傷跡』選集: 翻訳の目的と選択基準

新時期小説において、主流となる最初の文学思潮は、「傷跡小説」(伤痕小説)である。

傷跡小説は、文革終結後の中国で勃興した最初の小説流派であり、主な目標は、文革が普通の人々に与えた傷跡と災いを暴露することである。殆どの傷跡小説は1977年11月から1978年12月に行われた中国共産党第十一回三中全会までの、一年二ヶ月間のうちに書かれたもので、傷跡という流派の名前は、当該流派の代表作、盧新華(卢新华)の短編小説「伤痕」に由来しているといわれている。ただし、傷跡小説という呼び方は、特定の時期の小説の総称ではなく、文学と当時の政治上の現実との関係によるものである(董&丁&王 2005:401)。また傷跡小説は最初、中国でマイナスのイメージで受け止められた。なぜなら、これらの作品の感傷的な基調と暴露性の題材をとる傾向は、批評家の目からみると、中国文学史上の「暴露小説」の再演である。しかし、やがて傷跡小説に含まれるマイナスのイメージがなくなり、中

性的な呼び方になった(洪 1999: 257)。

当時、文革中(及びこの前の政治運動)に失脚したプロ作家の殆どはまだ名誉回復されず、執筆活動は禁じられたり、または自粛させられたりしたため、傷跡小説の創作主体は、ある程度の教育を受けた文学愛好者の青年たちを主とした。このため、傷跡小説は以下の特徴をもつ。

まず、短編小説が絶対多数である。なぜなら、中編または長編小説は時間と技術が必要であるが、傷跡小説時期の作者の殆どは長編小説を書く能力が欠けている。また、文革による自由創作の禁止から解放されたばかりの作者たちは、文革の荒波をいち早く世間に訴えるため、創作時間の短い短編小説を選んだのは当然といえる。ただし、一部の中篇、長編小説を傷跡小説に帰する説もある(洪 loc. cit.)。

高島(1981:8)が指摘するように、この時期(1976.10-1978.12)に書かれた作品の大半は、「文革」文学と同じパターン路線闘争文学であった。また近籐(2001:2)によると、「中国文学(筆者注:ここは文革文学を指す)においてめったに見えない夜が、ダムを崩す勢いで寄せてきたのは、まずは「傷跡文学」である……しかし、これは本格的な夜とはいえない」。つまり、傷跡小説はまだ文革時代の文学創作の枠組みを完全に超えてはいなかった。それにもかかわらず、傷跡小説の登場は、新时期文学の発端になり、啓蒙的な意義がある。のちに中国文学の主流となる「反省小説」、農村と都市の「改革小説」は、傷跡小説の影響をうけている。このうち、反省小説は傷跡小説の延長線と見なされている。なお、当時の傷跡小説の作家のうち、劉心武のような傷跡小説によって知られて、中国文壇で活躍する名作家になった人もいる。

では、日本での傷跡小説の受容事情はどうか。雑誌「人民中国」³ で一部の傷跡小説を紹介したり、翻訳したりしたことがあったが、「人民中国」は中国国務院文化部外文出版事業管理局所轄の雑誌なので、日本での翻訳と受容とはいえない。日本人によって出版された最初の傷跡小説の訳本は、1980年12月に出版された『傷跡』選集である。これは傷跡小説の選集で、訳者が最初「日中友好新聞」に断続的に連載していた翻訳を一冊にまとめたものである。「日中友好新聞」でのTTの翻訳プロセスは以下の三つに分けられる。①最初に一人が訳して、後でもう一人が修正し、さらに訳文を相談しながら検討して完成させる。②作品の半分ほどをそれぞれが翻訳して後に互いの訳を検討して完成させる。③李陀の作品は西脇、李勃の作品は工藤が最初に訳して、後で互いに検討して完成させる⁴。『傷跡』選集を編集する際、両訳者は再びTTを検討している。筆者が調査したところ、『傷跡』選集は本論執筆の2013年まで、日本で唯一の傷跡小説を主体とする訳本だと確認できる。訳者の工藤静子は30年間にわたって中国で生活した経験がある。同選集を訳した当時、日中友好協会の常任理事を務める一方、日本民主主義文学同盟員でもあった。もう一人の訳者西脇隆夫は、当時島根大学の助教授で、「文革以後の詩的状況」、「中国の少数民族文学」などの論文を発表したことがある。『傷跡』選集の訳者は、作家と文学研究者の組み合わせといえる。

訳者のあとがきによると、出版の目的は「これらの小説を通じて同時代の中国の人々がどのように考え、いかに生きようとしているかを知ることができる」ということと、「もし本書によって、現

代中国の文学に関心をもたれる方が少しでも増えれば、訳者にとって最大の喜びだと感じます」ということである(1980:254)。収録作品の選考基準は、「中国においても高く評価されているポピュラー作品」である(loc. cit.)。しかし、この目的を指針として設けられた選考基準と実際の収録作品の間に亀裂が見られている。

実は、『傷跡』選集のうちの5篇(「君よ、この歌をきけ」、「傷跡」、「献身—唐淋の場合」、「クラス担任」、「冤罪」)は、1978年度中国全国優秀短編小説賞(1978年全国优秀短篇小说评选)の受賞作である。この賞は、中国作家の公式機関である中国作家協会の委託で、中国作家協会の機関誌『人民文学』の編集部が、1978年10月に行った、当時中国小説界でもっとも権威がある文学賞である⁵。残りの2篇のうち、「めざめよ、弟」は「クラス担任」と同じように、刘心武が書いたもので、「クラス担任」の存在のせいか全国优秀短篇小说评选で受賞はしなかったものの、全国でよく知られた評価の高い秀作である。以上の6篇は訳者が挙げている選考基準の「中国においても高く評価されているポピュラー作品」に当てはまっている。

しかし、残りの一篇「阿恵」(阿慧)について、筆者は各種の文学選集、または大学教育で使用する文学教科書を調べたところ、この作品と作者(李勃)に関する記録が一箇所も見つからなかった。この小説は、権威がある小説賞を受賞したこともなければ、発表禁止リスト、批判を受けるリストにもなかった。訳者の工藤と西脇は「阿恵」を紹介する際、「『阿恵』は、雲南大学で書き上げられたということ以外不明」と書いた(op. cit.:105)。というのは、訳者たちもこの小説について詳しく知らなかったということだ。

この「阿恵」は、『傷跡』選集に選ばれたほかの6篇のような、中国においても高く評価されているポピュラー作品とはいえないであろう(実は「阿恵」は傷跡小説のカテゴリーに入るか否かさえ疑問)。それにもかかわらず、この小説は選集に収録されることになった。西脇によると、「阿恵」は工藤が収録させたが、選択理由は彼もわからないという。西脇はこの作品は「他の作品と比べて劣っているかもしれないが、政治色のない、このような作品も中国ではしだいに発表されているという例として選んだのかと思う」と述べている⁶。しかし、両訳者は、「阿恵」を、中国で高く評価されているポピュラー作品と偽って選んだことによって、『傷跡』選集での収録作品の選考基準と実際の収録作品が矛盾することになった。

『傷跡』選集のもう一つの特徴は、後出の新時期小説の訳本と比べ、誤謬が顕著に多いことだ。ここで言う誤謬とは、誤訳(translation error)とこれ以外の問題(印刷ミスなど)から構成されている。例えば、次のような誤訳の例がある。(前括弧内はテキスト内の話者、後括弧内はページ数、下同)

「献身—唐淋の場合」

ST: 卢一民送曾书记出来, 只听见曾书记叫了一声:

(曾书记の話) “啊, 多好的天气!”

(卢一民の話) “是大干的时候!”(362)

TT: 蘆一民が曾書記を送って外に出できた。曾書記の声だけが聞こえてきた。

(曾书记の話) 「おお、いい夜だ!」

(卢一民の話)「乾期ですね」(97)

「只」は「わずか、だけ」の意味を有しているが、ここで「だけ」と翻訳するのは間違いである。もし TT のように曾書記の声だけが聞こえたのなら、後に卢一民の発言が続くのは矛盾する。ここでの「只」は、動作と動作の共起を提示する副詞で、「すると、すぐ」の意味である。

また、“是大干的时候！”を「乾期ですね」に翻訳することも明らかな翻訳錯誤である。「干」は形容詞として、「乾燥、喉が渇く」など、水分が不足する意味が確かにあるが、このシーンには、当時の気候情況に言及していない。ST の文脈は「四人組」の迫害を受け、職場から遠ざけられていた研究者たちが文革終結後、再び科学研究を赦された時に対談した後の感嘆である。ここでの“是大干的时候！”の「干」は動詞で、「する、やる、働く」の意味であり、「これから本格的にやろう」または「今こそ本気にやる時であろう」と訳すべきである。

しかし、訳者は“是大干的时候！”の用法を知らないわけではない。なぜなら、別の作品にも同様の表現があり、次のように適切に訳されているからである。

「クラス担任」

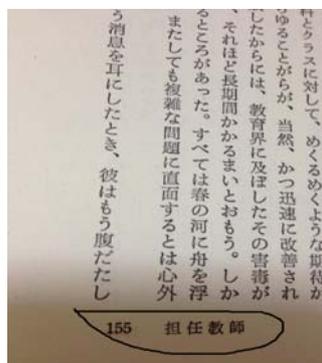
ST:他正是要“真格儿”地大干一场啊，一定会得到组织支持的！(30)

TT:彼はまさに、「本腰を入れ」ようとしている！党組織はかならず支持してくれる！
(192)

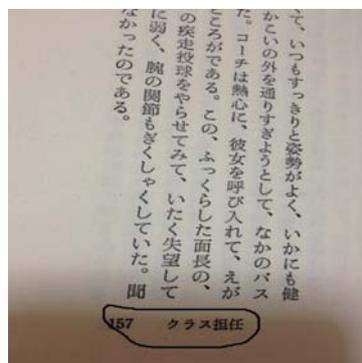
確かに「献身一唐淋の場合」と「クラス担任」の訳者は同一翻訳者であるかどうかは確認できないが、工藤と西脇のどちらも、コンテキストによって「大干」は「本気をいれてやる」の意味に判断できないはずがないだろう。

誤訳以外、編集ミスも『傷跡』選集で見られる。下記の図のように、刘心武の「班主任」の TT 「クラス担任」(本の 151—192 ページ)は、152 から 155 ページまでのページ左下に入れられたタイトルが「クラス担任」ではなく、「担任教師」になっている。

図①



図②



このように、『傷跡』選集は同時期の『天雲山伝奇』選集と比べ、誤謬が顕著に多い⁷。一つ

ひとつの誤謬の原因は現段階の調査で解明することはできないが、こうした誤謬は訳者らの特定の目的や語学能力の欠如などの原因によるものより、訳者と編集者の不注意による可能性が高いことは、前述の分析を通じて明らかだろう。翻訳のミスを批判する意図ではないが、『天雲山伝奇』選集との比較においては一つの目立つ特徴と思われる。

3. 『天雲山伝奇』選集：翻訳の目的と選択基準

1981年10月20日、『傷跡』選集が出版されたほぼ一年後、田畑夫妻による『天雲山伝奇』選集が垂紀書房から出版された。『天雲山伝奇』選集も『傷跡』選集と同じように、二人の訳者によって翻訳された。

夫の田畑光永は東京外国語大学中国語学科卒業後、東京放送(TBS)に入社した。彼は中国政治を主たる専門領域とし、1972年の田中角栄首相の日中国交正常化の際にも同行取材を行い、この後TBSの北京支局長、香港支局長などを歴任した人物である。『天雲山伝奇』選集以外、田畑光永は『中国の冬—私が生きた文革の日々』(サイマル出版会、1984)；『宋王朝 中国の富と権力を支配した一族の物語』(サイマル出版会、1986)など、中国の歴史と政治を反映する訳書がある。『天雲山伝奇』選集を翻訳した際、彼はTBS北京特派員であった。

妻の田畑佐和子は同学部卒業、東京都立大学中国文学専攻修士課程修了、岩波書店に編入社し、雑誌『思想』や、岩波中国語辞典、岩波日中辞典などの編纂に携わる。彼女は岩波書店退社後、東京大学、早稲田大学などで中国語・中国文学を講ずる傍ら、現代中国文学の翻訳も手がけた。『天雲山伝奇』選集を翻訳していた際、彼女は田畑光永と共に中国に住んでいった。

訳者の履歴からみて、『天雲山伝奇』選集の訳者は中国文学のみではなく、中国の政治・社会情勢にも強い関心を持っている。光永は訳本の最後に、32ページ(pp.267-298)に及ぶ「解説」を付け、このうち中国文学と中国共産党の党内闘争及び指導方針との関係を分析して説明している。彼によると、文革終結後、右側の鄧小平(実践派)と左側の華国鋒(すべて派)⁸による共産党指導部内部の亀裂が見られた。鄧小平は党内の指導権を掌握しようとして、共産党の裏側を暴露する文学(訳者の用語で「七九年文学」⁹)をある程度容認したが、1979年党内の実権を握り、国家の基本的な国策を変更してからは、民衆の共産党に対する不信を防ぐために、このような文学作品を抑制する姿勢を取った。光永が解説で提示したこの観点は、この後の様々な日中両国の中国文学研究(洪 1992、萩野 1995 他)で検証され、現在では主流となっている。

中国の文学と政治情勢を関連付けて観察していたので、田畑夫妻は中国文学の将来を慎重な態度で捉えた。解説において、田畑光永(1981:298)は次のように述べた。

中国の文学者たちは再び厳しい時代を迎えている。…(中略)…現在、「七十九年文学」の旗手たちはしばしの沈黙を余儀なくされているようである。この「しばし」がどれほど続くのか予測はつかないが、外国の読者たるわれわれは、いつの日かの「七十九年文学」の

再生を期して待つほかはない。

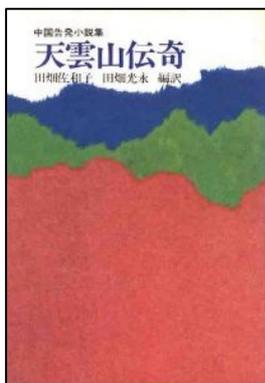
工藤と西脇は、中国人がどのような考え方をするかを伝えて、日本人に中国文学を愛させようという目的で翻訳したが、それとは異なって、田端夫妻 (ibid:267) は以下のような目的で『天雲山伝奇』選集を翻訳する。

中国の場合、作家たちは見据え、暴きだした傷跡や病根自体の存在すら、様々な理由から外部世界にはそれと分かる形で知られていなかった事情がある。従って、外部世界の一般読者には、この三篇を含む作品群の題材自体がなじみにくいという面があることも否定できない。あるいは、たんになじみにくいという以上に、それまでの中国に対する概念を覆される(傍点強調は筆者による)ことになるかもしれない。

しかし、このように幅広く、かつ深く、中国社会主義を問い直す作業が行われたのは、三十年来初めてのことであり、その意味ではこの種の文学作品の誕生そのものが、中国人自身による自国に対する再認識の過程である。我々はこれらの作品を読むことを通じて、その過程とともに歩むことになる。「なじみにくさ」の中に、これらの作品の意味があるともいえる。

まとめると、田畑夫妻の目標は、訳本を通じて、日本人の中国に対する概念を覆させ、日本人に中国の現実を再認識させることである。彼らはこの目標にそって、訳本の題名と ST の選択基準を策定した。

訳本の題名からみて、田畑夫妻は『天雲山伝奇』選集に中国告発小説集という性質を説明するタイトルを冠した。「告発小説」という言い方は、「傷跡小説」、「反省小説」など、学術界で通用する新時期文学を分類する専有名詞ではない。大辞泉によると、告発とは、「悪事や不正を明らかにして、世間にしらせること」であり、80年代前期までの新時期小説の殆ど全ては「告発小説」のカテゴリーに属するといえる。中国文学研究界にもこの観点を支持する論調が大量にある。例えば、洪(op.cit.:240)によると、80年代前期まで、文学のテーマは文学の歴史災難に対する証言、歴史責任に対する思考と探究である。また黄(1988:8)によると、新時期小説は現実生活での不正の行為と存在する問題を暴露することである。つまり、80年代前期の中国小説の主流では、「告発」は共通する特徴である。そのため、この選集を特別に「告発小説」と名付けること自体が、文学上無意味であると思われる。訳者の目的は、おそらくこの用語の使用を通じて、日本人読者に中国で起きた悪事や不正を意識させることであろう。



(図③):『天雲山伝奇』選集の表紙

STの選択基準からみると、田畑夫妻は『傷跡』選集のように文学思潮にこだわることはせず、三篇の異なる文学思潮に属する中編小説を選定したようだ。このうち、「天雲山伝奇」は反省小説の代表作といわれ、文革以前の1959年からの中国共産党による反右傾闘争の時の冤罪を暴露した。「転勤」(中国語題名《调动》)は、文革中、発展していない地域に(半強制的に)移動させられる中国の若者が直面する悲惨な運命と共産党幹部の不正行為を暴露した。「人妖の間」(中国語題名《人妖之间》)は、計画経済の枠組みで共産党内部の腐敗と横領を暴露したルポルタージュ体裁の文学である。「暴露」のテーマ以外、この三篇の小説には二つの共通点がある。

①文革の後景化。傷跡小説と違って、いずれの収録された小説も、文革に対する批判を目的としてはいない。それどころが、『天雲山伝奇』選集の小説で、文革中の被害者が、文革前、または文革後の加害者(「天雲山伝奇」での呉遙、「転勤」での牛朝傑)になるという、中国での実情を伝えている。これは文革批判を中心とする『傷跡』選集に収録された作品との根本的な相違点である。田畑夫妻がこのような小説を選んだ理由は、中国の混乱が文革のせいであって、文革終結後の中国は次第によくなるという、当時の日本にあった考え方に反論しようとするのではなかろうか。訳者は文革の後景化を通じて、文革が終結した中国において、不正がまだたくさんあることを日本の読者に意識させている。

②選ばれた作品のいずれも中国では、民間で大人気を博したと同時に、政府側の批判も浴びていた。こうした事情について、田畑光永は解説でこれらの作品に対する讃頌と批判の幾つかを対照的に引用した。「天雲山伝奇」の場合、作家屠案は「自分の魂を移す鏡のようだ」と評価された一方、共産党幹部により「右派分子を持ち上げすぎる」と批判された。「転勤」は若者の間で大きな反響を呼んだと同時に、「主人公の行動が卑劣で読者に嫌悪感を与える」、「転勤」はマルクス主義を指針としない…」など、公式の批評では、袋叩きにされたと解説されている¹⁰。「人妖の間」は「多くの省、市の新聞、工場の小新聞までが全文を転載し…少なくとも五つの省、市の放送局が全文を放送する…」一方、一部の人々、特に作品の舞台である黒龍江省政府要員らの猛烈な反対を引き起こした。「一年もならぬ間に、つづいて三回にもわたって作者に反対し、これ(「人妖の間」と作者の劉賓雁(刘宾雁)を指す、筆者注)を攻撃するキャンペーンが行われる…」ことになった(田畑 op.cit.:279-287)。田畑がこのような事実を対照的に述べる意図は、中国共産党と中国の普通の民衆間の亀裂を日本の読者に見せるためだろう。共産党の不正を暴露する小説は民間で大歓迎をうけながら、政府から公式の批判を浴びた事実は、民衆がほしい文学作品と政府のイデオロギー宣伝用の文学作品にズレが有ることを示し、共産党支配下の中国の文芸界は文学作品創作のジレンマに陥り、輝く未来を有するとは限らないと、日本人読者に伝えた。

4. 訳者注から見た両翻訳の比較

訳本のタイトルとSTの選択基準以外にも、訳者は常にテキスト翻訳で特定の戦略を使用し、訳本を操作する。訳者注は翻訳戦略の一種として、訳者による訳本に対する明示的な干渉で、観察しやすいものである。それゆえ、本節では、訳者注(translator's note)

に対する考察に基づいて、訳者がいかに注を利用して、TT に影響を与えるかを分析する。

Delisle (1999/ 2004:284)によると、訳者注とは、「訳者が TT に入れる、自らが役に立てると考えるもの」である(A Note that <translators> add to translated <texts> in order to provide information they consider to be useful.)。訳者は ST の内容、ST 文化(文明)が翻訳不可能、または TT 読者にとって理解不能だと判断する場合、自らこれらの内容を説明したり、または ST の特徴を TT で際立たせたりすることがある。しかし、どの内容が読者にとって理解不能か、または ST にどのような説明をつけるかは、訳者の判断による。Vermeer によると、ある行為を行為と呼べるのは、行為者がその行為を行う動機を説明する(あるいは説明できる)からである(1989:176 cf. Nord 1997:19)。それゆえ、訳者注は一つの行為として、どこに付けるか、またどのように説明するかは、訳者の目的に裏付けられている。

訳者注を考察するために、『傷跡』選集と『天雲山伝奇』選集における割注と脚注の訳作別数量表、及び訳者注の内容一覧表¹¹をそれぞれ作成した。これらの表に対する分析を経て、『天雲山伝奇』選集と『傷跡』選集における訳者注は数量的にも内容的にも差異があることがわかった。

4.1 訳者注の数量に対する考察

『傷跡』選集と『天雲山伝奇』選集における割注と脚注の訳作別数量表

『傷跡』選集	割注	脚注
「君よ、この歌を聴け」	0	2
「傷跡」	0	1
「献身一唐淋の場合」	0	2
「阿恵」	0	0
「めざめよ、弟」	4	5
「クラス担任」	1	1
「冤罪」	0	1
『天雲山伝奇』選集		
「天雲山伝奇」	14 ¹²	1
「転勤」	6	19
「人妖の間」	18 ¹³	9

両訳本のページ数¹⁴はほぼ同じ(『天』266 ページ対『傷』245 ページ)とはいえ、『天雲山伝奇』選集での訳者注は数量上、『傷跡』選集より圧倒的に多いことが分かった。割注の場合、『天雲山伝奇』選集対『傷跡』選集は 38 対 5 になり、脚注の数量対はやや近いが、29 対 12 になる。

作品別から見て、『天雲山伝奇』選集での田畑佐和子が翻訳した「天雲山伝奇」と「人妖の間」では、割注は脚注よりはるかに多い。田畑光永が翻訳した「転勤」では、脚注は割注よりは

るかに多い。『傷跡』選集の場合、「めざめよ、弟」は紙幅が別作と同じぐらいだが、割注も脚注も別作より多い。そのため、『傷跡』選集の翻訳者のうち、一人が「めざめよ、弟」を翻訳して、もう一人が残りの6篇を翻訳したと、筆者は推測している。このような事実から、割注と脚注の使用は常に翻訳目的を達成する手段として意識的に使用されながら、訳者個人のスタイルの間に一定の関連性が見られる。

4.2 訳者注の内容に対する考察

両訳本での訳者注のどちらも固有名詞に対する説明を中心に行っているが、注の内容からみて、『天雲山伝奇』選集での訳者注は次の4種類に分類できる。

① 語彙の概念的な意味(conceptual meaning)に対する説明

例：(表では作品名は頭文字で表記する、下同)

作品名	割注/脚注	ページ数	注	説明
天	割	9	天雲鎮	町

② 固有名詞の文化、社会的意味に対する説明

例：

作品名	割注/脚注	ページ数	注	説明
天	割	21	三大改造	経済上の社会主義的改造

③ 文脈の理解を助ける説明

例：

作品名	割注/脚注	ページ数	注	説明
人	脚	223	こちらも副組長は女だった	北京の中央文革小組では江青だった

④ その他

例：

作品名	割注/脚注	ページ数	注	説明
転	脚	102	遠西県	実在しない架空の地名

これに対して、『傷跡』選集での訳者注はほぼ文革中の固有名詞の文化、社会的意味に対する説明に集中している。『天雲山伝奇』選集で他の機能を果たす訳者注は、『傷跡』選集において、他の戦略に交替される傾向が見られる。例えば、

「冤罪」

ST:……老李提这个包默默地跟在后面。王公伯停下来, 接过妻子手里的包, ……(55)

TT:……妻が小さな包みを持って続いた。王公伯は立ち止まり、妻の手から包みを受け取った。……(226)

ST の文脈で「老李」は「妻」の名前であると理解できるが、TT で「老李」は削除された。『天雲山伝奇』選集において、この文は次のように翻訳される可能性があるだろう。

TT:……老李(王公伯の妻)が小さな包みを持って続いた。王公伯は立ち止まり、妻の手から包みを受け取った。……

「老李(王公伯の妻)」割注は、種類③の文脈の理解を助ける説明である。もう一つの例を挙げよう。

「君よ、この歌を聞け」

ST:我们要周总理, 不要弗朗哥, 更不要那拉氏。(202)

TT:われらは周首相を望み、フランコ、ナチスを望まぬ。(33)

ST の「那拉氏」は清王朝の独裁者、日本人では西太后として知られたエホナラの満州語の音訳で、日本人読者にとって馴染まない存在であり、ジャンル②の訳者注を付ける必要があるかもしれないが、TT ではこれを発音に近いナチスに書き換えた。日本人読者の殆どはナチスを知っているので、訳者注を付ける必要がなくなった。以上の分析から、『天雲山伝奇』選集では訳者注が多用されていたが、『傷跡』選集においては訳者注を避ける方策として他のストラテジーが使用されていることがわかった。

しかしながら、『傷跡』選集の訳者注の数量もジャンルも『天雲山伝奇』選集より少ないが、それぞれの訳者注の字数は、殆ど『天雲山伝奇』選集より遙かに多い。両訳本で重なった唯一の訳者注「十七年」(上は『傷跡』選集、下は『天雲山伝奇』選集)を対照してみて、『傷跡』選集での文字数は『天雲山伝奇』選集のより倍以上になることがわかった。

作品名	割注 / 脚注	ページ数	注	説明
め	脚	135	十七年	新中国の成立後「文革」までの 17 年間を指す。ブルジョア思想が支配していた期間として、「四人組」は全面的に否定した。
天	割	75	十七年	建国(1949)から文革開始(1966)までを指す

『傷跡』選集の訳者注で増加する部分は、ほぼ語彙に対する補充説明である。このような補充説明は、客観的な情報提供と主観的な価値判断に分類できる。客観的な情報提供の場合、「幹部学校」は「毛沢東、『四人組』の政策に反対する人々をいれる所となった。」；「文攻武衛」は「実際には『武闘』が盛んにおこなわれたのは周知のとおり」などがある。価値判断の場合、「高い帽子」は「残虐行為」；「犬の子」は「軽蔑して言った言葉」などがある。これらの客観的な情報提供と主観的な価値判断のどちらも、文革終結後の共通認識になったもので、訳者は正しい注で情報を日本の読者に伝達しているといえる。

4.3 両訳本における訳者注の目的

Vermeerによると、翻訳は意図を伴ったインタラクションである。インタラクションでは、ある行為を実施するかしないかの選択肢（つまり可能性：筆者注）がある(1986:220; cf. Nord 1997:19)。訳者注を、翻訳で使用するかどうかは選択できることである。では、両訳本はそれぞれどのような目的で訳者注を使用したのか。

一般的に、訳者は特定の目的に基づき ST を選択したり、翻訳したりしているが、訳者注などの戦略も、この目標を達成する手段と見なすべきである。『傷跡』選集の場合、日本人に同時代の中国人の生存状態を知らせることと、現代中国の文学に関心を持つ人を増やすという二つの目的を達成するには、訳者は文革がもたらした被害を暴露する傷跡小説を選択したり、後書きで「『四人組』追放後三年、いま、中国文学界は活況を呈している」(工藤・西脇 op.cit.:247)ことを宣伝したりした。訳者注も、これらの宣伝の一翼を担った。なぜかという、『傷跡』選集での訳者注の殆どは、文革の固有名詞に対する説明である。確かに、傷跡小説のすべては文革時期を舞台にしたので、小説には文革に関する固有名詞も沢山あれば、文革に関わらない、日本人読者にとって分かりにくいと思われる語彙と表現も沢山ある。例えば、

「君よ、この歌を聞け」

TT:「私は楊柳、楊開慧の楊、柳直荀の柳」(18)

楊開慧¹⁵、柳直荀¹⁶がどのような人物であるかを知っている日本の読者は少ないであろう。このような日本人読者にとって難解な語彙と表現が TT に散見されるにもかかわらず、訳者はこれらの語彙と表現に注を付けなかった。ここから訳者が注を付ける際、文革に関わる名詞を重んじる傾向が明らかである。さらに、前述通り、訳者は『天雲山伝奇』選集における注のような情報提供の付け方にとどまらず、客観的な情報提供と主観的な価値判断を通じて、文革中は一切停滞、文革後は万物がよみがえるという二元対立の図式を作り上げた。このような二元対立は、訳者が後書きで強調した文革終結後の中国文学界が活況を呈した記述に合理性を与える。

一方、『天雲山伝奇』選集の目的は、日本人に中国を再認識させることである。訳者注はこの目的によれば、読者に文章を一層理解させることと、小説テキストの信憑性を証明するとい

う二つの役割を果たしている。

まず、読者に文章を一層理解させることは、日本人に中国を再認識させる基礎である。1980年代初頭はまだ、一般の日本人の読者は中国の国事情に詳しくない時代であるので、テキストに対する情報補充は不可欠である。このような情報補充は固有名詞に対する説明のみならず、コンテキストによって中国人読者が暗黙のうちに了解されている情報を明示化する必要もある。例えば：

作品名	割注 / 脚注	ページ数	注	説明
人	脚	223	こちらも副組長は女だった	北京の中央文革小組では江青だった

「こちらも副組長は女だった」中の「も」は、普通の日本人読者を戸惑わせる恐れがある。なぜなら、北京の中央文革小組の副組長が江青(毛沢東の夫人)だということは中国での常識でありながら、中国政治に無関心な外国人は知らない可能性が高い。さらに、これは前後の文脈で推測できないことである。そのため、訳者はこの暗黙の情報を注で明示化して、日本人読者の理解を阻害する要素を排除する。

次に、暴露小説は現実世界に対する直接的な反映として、信憑性が大切である。なぜなら、もし読者が小説の内容が現実を反映していないと受け止めると、それまでの中国に対する概念を覆して、中国を再認識するという田畑の呼びかけが効かなくなる可能性がある。とくに「人妖の間」のようなルポルタージュ文学にとって、信憑性が最も重要な要素である。そのため、訳者は「転動」の舞台となる遠西県と蘇南県は実在しない架空の地名であることを読者に説明した(ジャンル④)。この説明を通じて、天雲山(「天雲山伝奇」の舞台)と濱県(「人妖の間」の舞台)という地名が架空ではないことを際立たせる。

5. 結論

日本での中国新時期小説受容は、『傷跡』選集と『天雲山伝奇』選集の出版を起点としている。このうち、『傷跡』選集は日本人を同時代の中国人の生活状態を知らせることと、現代中国の文学に関心を持つ人を増やすという目的で、文革がもたらした被害を訴える傷跡小説を中心に選んだ。『天雲山伝奇』選集は日本人の中国に対して持っている概念を覆して、中国を再認識させるために出版されたため、中国の不正を暴露する各流派の小説を選んだ。訳者は特定の翻訳目的によって、STの選択基準をきめることが明らかになった。また、STの選択基準のみでなく、訳者は特定の翻訳目的にそって、訳者注を使用してTTを操作した。『傷跡』選集の場合、訳者は文革中の固有名詞を中心に注を付けて説明して、文革の暗みと文革終結後の明るみを対照的に提示しようとした。『天雲山伝奇』選集の場合、訳者は読者に文章を一層理解させることと、小説テキストの信憑性を証明するために、様々なジャンルの注を使用した。「暴露」を共通のテーマにした新時期小説のTTは、異なった翻訳目的の論拠

として使用された。

ただし、ST の選択基準、及び訳者注がもつばら訳者の翻訳目的のみで決定されるとは限らない。訳者は ST を翻訳する際、好み、スタイルなど個人的な要素を TT に持ち込むこともある。本研究は、『傷跡』選集と『天雲山伝奇』選集の場合、ST の選択基準と訳者注がすべて訳者の翻訳目的で決まることを証明するものではなく、いかに訳者の翻訳目的と関連があるかを記述するものである。

日本において、『傷跡』選集と『天雲山伝奇』選集はある程度相補して、新時期小説、ひいては文革後の中国の一面を日本読者に見せる最初の新時期小説の訳本である。この二つの訳本をきっかけに、中国新時期小説の訳本は相次ぎ日本で出版されて、20 世紀の 80 年代は、日本での中国新時期小説受容の花盛りになった。訳者の工藤静子、西脇隆夫、田畑夫妻は先駆者として日中文学交流史に必ずやその名を残すことだろう。

.....

【著者紹介】

孫 若聖 (Sun Ruo Sheng) 神戸大学国際文化学研究所博士後期課程在学中。研究方向は翻訳理論、翻訳史。日本における中国新時期小説の翻訳史の研究に従事。

.....

【注】

1. 操作(manipulation)という語は日本語で常にマイナスの連想があるが、Chesterman(1997)の理論では様々な要素が翻訳に影響を与える、という現象を描写する中性的な用語である。本研究での操作は、Chesterman の定義に従って使用される。
2. 『天雲山伝奇』選集のすべての訳作の最後に、訳者の担当と翻訳時期についての記録がある。
3. 『人民中国』とは、中国、北京で出版されている日本語月刊雑誌。国務院文化部外文出版事業管理局《人民中国》雑誌社の発行(日本での法定発行所は東方書店)。1953年6月、英文の対外広報誌《People's China》の日本語版として創刊された。その後、中国政府の政治・外交の広報誌《北京周報》(1963年8月創刊)が発行され、中国事情紹介の総合誌となった。中国出版の日本語定期刊行物にはほかに月刊グラフ誌《中国画報》がある。リンク：<http://kotobank.jp/word/%E4%BA%BA%E6%B0%91%E4%B8%AD%E5%9B%BD>。2013年6月27日アクセス。
4. 西脇隆夫氏へのメールによるインタビュー。
5. 1978年度中国全国優秀短編小説賞審査委員会のリスト:矛盾, 周揚, 巴金, 刘白羽, 孔罗荪, 冯牧, 刘剑青, 孙犁, 严文井, 沙汀, 李季, 陈荒煤, 张天翼, 周立波, 张光年, 谢冰心, 周立波, 林默涵, 草明, 袁鹰, 曹靖华, 葛洛, 魏巍, 唐弢。人民文学編集部(1980)『1978年全国优秀短篇小说评选作品集』, p.648。
6. 西脇隆夫氏へのメールによるインタビュー。
7. 『天雲山伝奇』選集を調べたところ、このような錯誤は一箇所も見つかっていない。
8. 鄧小平派の代表的なスローガンは「実践は真理を検証する唯一の基準」であり、華国鋒派の代表的なスローガンは「毛沢東による決定はすべて支持すべき、毛沢東の指示はすべて従うべき」であるので、訳者はそれぞれ鄧小平派を実践派、華国鋒派をすべて派と名付ける。これらの用語は中国政治研究での専門用語ではない。
9. 「七十九年文学」とは、中国文学研究の専門用語ではないので、訳者自ら 1979 年に出版した、中国共産党の裏面を暴露する小説に対する呼び方である。また、引用部の括弧は訳者

によるもの。

10. 1980年に、共産党指導部が指名した「五つの毒草」の一つとして吊るし上げられ、作者の徐明旭(xu ming xu)は修士修了後、チベットに追放された。
11. 訳者注の内容一覧表はアペンディクスを参照。
12. 割注の「反右傾運動」の説明は、「解説参照」であるが、割注の形式があるので、統計データに入れる。
13. 割注の「知識青年センター」の説明は、「後出」であるが、割注の形式があるので、統計データに入れる。
14. 訳本本文のページ数。
15. 毛沢東の初任妻、29歳の時。国民党軍隊に殺害された。
16. 共産党員の知識人、34歳の時、国民党軍隊に殺害された。
17. 訳者はここで「三つの忠誠」しか説明していない。

【参考文献】

英語

- Chesterman, A. (1997). *Memes of Translation: The Spread of Ideas in Translation Theory*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Delisle, J. (1999/2004) *Translation Terminology*. Beijing: Foreign Language Teaching and Research Press.
- Leech, G. (1983). *Semantics The Study of Meaning* (Second edition). Penguin Books.
- Nord, C. (1997). *Translating as a Purposeful Activity*. Manchester: St. Jerome.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility : a history of translation*. London /New York : Routledge.

中国語と日本語

- 曹文軒(1988)《中国八十年代文学现象研究》, 北京: 北京大学出版社
- 董健&丁帆&王彬彬(2005)《中国当代文学史新稿修订本》, 北京: 人民文学出版社
- 萩野脩二(1995)『中国“新時期文学”論考: 思想解放の作家群』、吹田: 関西大学出版部黄伟宗(1988)《新时期文艺论辨》, 广州: 中山大学出版社
- 洪子成(1999)《中国当代文学史》, 北京: 北京大学出版社
- 廖金球(近藤直子訳)(2001)《有狼的风景——读八十年代中国文学》, 北京: 人民文学出版社。
- 刘勇(2012)《中国现当代文学》, 北京: 中国人民大学出版社
- Munday, J. (李德凤訳)(2007)《翻译学导论》(*Introducing Translation Studies*) 北京: 商务印书馆
- 高島俊男(1981)『声無き処に驚雷を聞く: 「文化大革命」後の中国文学』日中出版

【考察用テキスト】

日本語

- 工藤静子・西脇隆夫訳(1980)『傷跡』日中出版
- 田畑光永・田畑佐知子(1981)『中国告発小説集 天雲山伝奇』亜紀書房

汉语

魯彦周《天云山传奇》,《1979-1981 中篇小说选》(1981),北京:人民文学出版社

刘宾雁《人妖之间》,《刘宾雁报告文学选》(1981),北京:北京出版社

徐明旭《调动》,《争鸣作品选编》第一辑(1981),北京:北京市文联研究部

《一九七八年全国优秀短篇小说评选作品集》,(1980),北京:人民文学出版社

アペンディクス

1. 『傷跡』選集の訳者注一覧表(ページ数順、且つ表では作品名は頭文字で表記する)

作品名	割注/脚注	ページ数	注	説明
君	脚	10	右派の巻き返しに反撃する運動	「三つの指示をカナメとする」という鄧小平の発言に対し、それを修正主義綱領として 75 年 11 月ごろより「四人組」が組織したキャンペーン。
君	脚	27	清明節	春分の十五日後(四月五日または六日)墓参をして故人をしのぶ習慣がある。
傷	脚	47	抓纲治国	(カナメをつかんで国を治める)1976 年、中国共産党中央委がおこなった戦略的決定。毛沢東思想のもとに大衆を立ち上らせ、団結をはかり、「四人組」批判を深め、政治、経済、軍事、文化、対外活動の各分野でプロレタリア革命路線の全面的な正しい貫徹を図る、というもの
献	脚	76	荣宝斋	中国政府文化部直轄の古美術、書画、版画などをつくり販売している。三百年以上の伝統を持つ店
献	脚	83	高い帽子	「文革」当時「造反派」が「反党反毛」と批判された人たちにかぶせたとんがり帽子。本人の身丈より高いものさえあった。これをかぶせ市中をひきまわすなどの残虐行為が行われた。
め	脚	117	幹部学校	五・七幹部学校のこと 当初は幹部をある一定期間肉体労働に従事させ、労働の大切さを自覚させるために地方に作られた施政。しかし、後に、毛沢東、「四人組」の政策に反対する人々をいれる所となった。

め	脚	118	文攻武衛	闘争には説得、即ち「文で攻め」、相手が暴力を用いたら「武で守る」という、「文革」当時のスローガン。だが、実際には「武闘」が盛んにおこなわれたのは周知のとおり
め	割	122	鋼琴	ピアノ
め	割	122	提琴	バイオリン
め	割	123	半斤	500 グラム
め	脚	124	「なぜ...もあった」	少年先鋒隊の旗はスカーフをとった意味で一つの角が三角形に欠けている。「知識角」、「動脑筋爺爺」はいずれも真理探求、頭を働かせる、という意味の象徴。文革中少年先鋒隊はソ連式ということで解体され、紅小兵が生まれた。知的欲求も「四旧（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣）」ということで批判された。
め	脚	135	十七年	新中国の成立後「文革」までの17年間を指す。ブルジョア思想が支配していた期間として、「四人組」は全面的に否定した。
め	脚	135	犬の子	文革中、圧迫された幹部たちの子弟を軽蔑して言った言葉
め	割	143	三つの忠誠と四つの無限	中国共産党、毛沢東思想、マルクス・レーニン主義に対する忠誠 ¹⁷
ク	割	164	牛虻	あぶ
ク	脚	185	四清運動	「文革」の初期、農村から始まった政治、思想、組織、経済を清める運動
冤	脚	201	老三篇	もっとも読まれた毛沢東の三つの論文。「ベチューンを記念する」、「人民に奉仕する」、「愚公山を移す」

『天雲山伝奇』選集の訳者注一覧表(ページ数順)

作品名	割注/脚注	ページ数	注	説明
天	脚	3	共産党地区委員会の組織部副部長	地区とは省と県の間での行政区画。組織部とは党内の人事問題を扱う部
天	割	3	实事求是	事実に即して
天	割	4	吳遙書記	正式には副書記だが、普段は副を省いて呼

				ぶ
天	割	9	天雲鎮	町
天	割	15	鎮革命委員会	鎮革命委員会「町役場」
天	割	18	50年代	1950年代
天	割	19	寨子	砦
天	割	21	三大改造	経済上の社会主義的改造
天	割	22	素人に甘んじてはい けない	専門的な知識を身につけよの意
天	割	49	土法鋼炉運動	1958年に伝統的な工法で製鉄する運動が 全国で強硬に推進された
天	割	50	牛舎	非公式の監獄
天	割	58	反右傾運動	解説参照
天	割	67	紅小鬼	共産党に教育された子供
天	割	75	十七年	建国(1949)から文革開始(1966)までを指 す
天	割	91	十一期三中全会	1978年12月に開かれた中国共産党の中央 委員会総会
転	脚	102	遠西県	実在しない架空の地名
転	脚	103	一打三反	1970年春から始まった、反革命分子に「打 撃」を加え、汚職、浪費、不正な投機活動の 「三つに反対」する運動
転	脚	103	五一六	文革初期に活躍し、後に極左として批判さ れたグループ
転	脚	103	批林批孔運動	1973年秋から始まった林彪批判と合わせて 孔子を批判する運動
転	脚	104	蘇南県	実在しない架空の地名。
転	割	104	去年の暮れ	旧正月
転	脚	110	韓黛玉	清代の長編小説『紅樓夢』の悲恋のヒロイ ン、林黛玉の名前をもじったもの
転	脚	112	網師園	蘇州市内南部にある庭園
転	脚	113	天麻	多年生の草本植物、「おにのやがら」。めま い、頭痛などの薬に用いる
転	脚	123	白酒	茅台酒のような強い蒸留酒の総称
転	脚	124	三里	一般に使われる道の単位としては、一里は 五百メートル
転	割	128	百斤	五十キログラム

転	割	130	一斤	五百グラム
転	脚	134	地区	県の上、省の下の行政区画。
転	脚	134	双打	投機と汚職の二つをなくす運動。
転	脚	135	四清運動	1960年代前半に農村で進められた運動で、帳簿、財産、倉庫、労働点数を点検して、不正を摘発した。
転	脚	142	鍾志民	不正に大学入学への推薦をうけ、自らそのことを暴露して退学した学生。
転	割	143	公尺	メートル
転	割	143	公斤	キログラム
転	脚	149	孤山	浙江省杭州の西湖のほとりにある独立峰。梅で有名。
転	脚	150	李廣	「李廣」漢代の不運の名将。
転	割	154	検討	「中国語の“イエン・チウ”」を“煙草”「“イエン”」と“酒”「“チウ”」
転	脚	164	側耳根	雲南、貴州、四川などに多い薬用、食用になる野生の草本食物。食用には根茎を塩付けにする
転	脚	198	デイトロフ	1882-1949、1933年、ドイツ国会放火事件に関わったとしてライプチヒで裁判にかけられたが、自らの弁論で無罪をかちとった。後にブルガリア首相。
転	脚	198	ゲーテの詩	「まどゐの歌」所収「コフタの歌その二」の一部。
人	脚	208	田青天	清廉な官吏として語りつがれている北宋の役人・包青天の名にちなんでこう呼んだ。
人	脚	208	左派支援	文革中の各造反派の対立、混戦状態を收拾するために解放軍から派遣された隊伍をいう
人	割	208	カーキ色のオーバー	軍服
人	脚	209	雷鋒	1962年に殉職した解放軍兵士。模範的人物とされている。
人	割	209	煤炭会社	煤は石炭のこと
人	割	210	毛	一毛は日本円で十数円
人	脚	210	武装部	民兵組織を統轄する機構

人	割	214	白肉酸菜血腸	豚の肉と腸づめと白菜漬物の炒め料理
人	割	215	偽	満州国の
人	脚	216	張志新	省委の女性職員。林彪、江青に反対してカドで投獄され、75年に処刑。79年に名誉回復。
人	割	217	カーキの棉服	軍服
人	割	218	組織部	幹部の人事を扱う
人	割	219	劉志明	王の息子
人	割	220	一万斤	五千キロ
人	割	221	知識青年センター	後出
人	割	221	県革命委員会	行政機関
人	脚	222	赤い	「紅」には思想がよいという意味で、羽振りのよい意味とがある。庶民は、王守信のおかげで一家中が大きなカオをしているととった
人	脚	223	こちらも副組長は女だった	北京の中央文革小組では江青だった
人	割	223	県人民委員会	革命委員会に代わる前の行政機関
人	割	230	晴綸	合成繊維の一種
人	脚	237	小靳庄	天津近くの農村。毛沢東夫人の江青女史が「大寨」とはりあって農業のモデルにしようとした
人	脚	237	甫志高	羅広斌・楊益言の小説『紅岩』の登場人物。主人公の「江ねえさん」を敵に売る裏切り者
人	割	238	孔老二	孔子
人	脚	240	幹部の「大飲み食い」	官費の宴会で大いに飲み食いすること
人	割	243	掲、批、察	四人組の一統に対する告発、批判、洗い出し
人	割	244	結合	取り込む
人	割	261	黄世仁	悪徳地主